

# 蹄壁の長さを長く残しすぎない

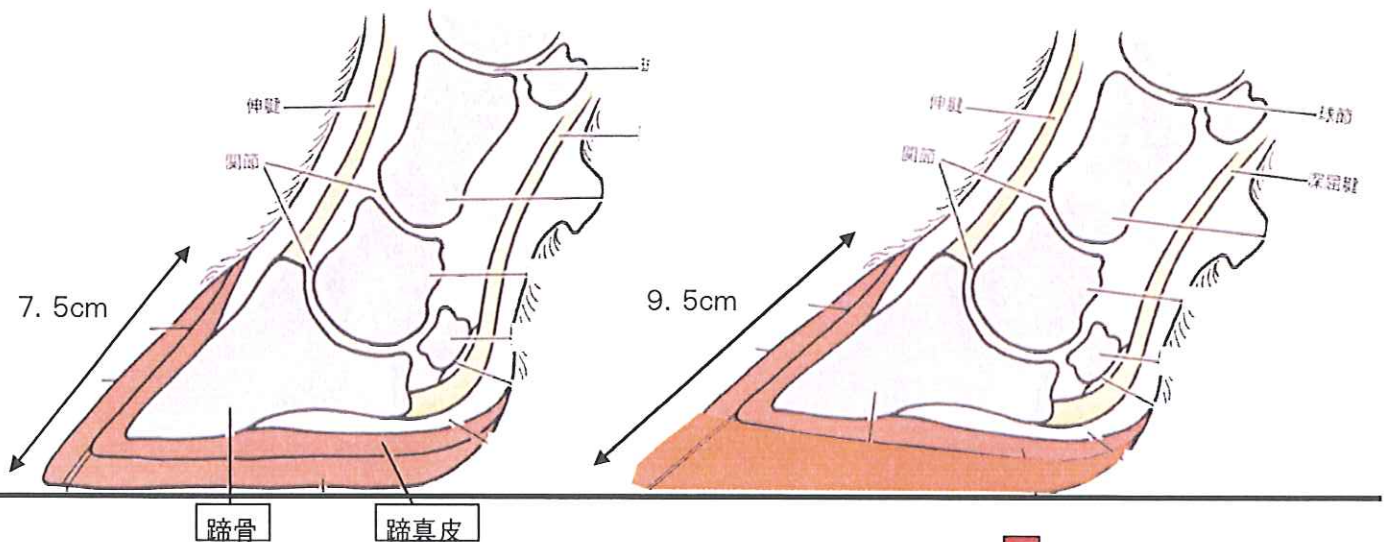
**蹄壁は7.5cm 角度は45~50°**

乳牛において適切な蹄形を維持することは蹄病の予防・生産性向上、且つ生産寿命を長く保つために重要なポイントであり、多くの農場で一年に2~4回もの削蹄をおこなっているのもそれが目的だと思います。

とくにフリーストール牛舎における適切な蹄形は「内外蹄の均等なバランス」と「適切な蹄角度」が重要になり、最適な蹄形により体重が肢に均一に分散し、蹄底や蹄壁に均等に負荷がかかるようになることで、硬い床面から受ける負重ストレスをうまく逃がすことができます。このために開発されたのが「ダッチメソッド」といわれる削蹄法で、この地域でも多くの削蹄師さんにより実施されています。ダッチメソッドでは、蹄壁の長さは約7.5cm、蹄底との角度が45~50°になるように削蹄することを推奨しています。

しかし最近いくつかの農場で、削蹄直後の蹄なのに蹄壁前面の削切が不十分(長い)な事例を見受けます。この場合、おおくのケースで蹄踵(蹄底のかかとの方)は十分に削られています(肢を上げて削る際に削りやすい部分だからだと思います)。しかし蹄壁前面が長いために必然的に蹄尖(蹄底の前の方)の角質が分厚くなっており、結果的に蹄の角度が低くなり肢勢は後傾してしまいます。

下の図は、蹄壁の長さを2cm長く残してしまうことにより、蹄底角質の蹄尖部分だけが分厚く残ってしまうことで、蹄内部構造がどのようにバランスを崩しているかを示したものです。この程度の誤差は結構日常的に見かけられるの誤差です。

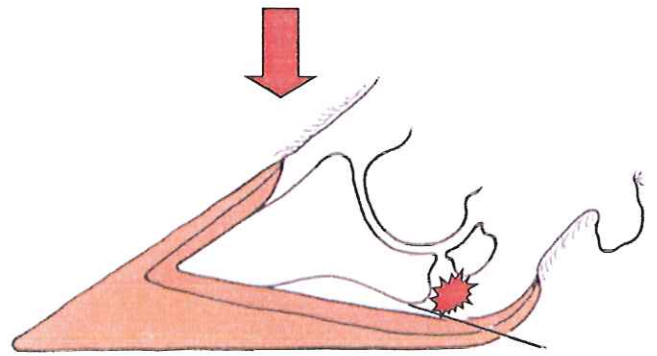


このように蹄尖角質が分厚くのこり、蹄踵の低くなった蹄内部では蹄骨後縁による蹄真皮の局所的圧迫が起こり、これが蹄底潰瘍へと進展していきます。

また一度このような蹄形になり後傾肢勢になることで更に蹄壁角質が削れず(蹄壁角質は蹄底角質よりも硬いことも関係)蹄壁のみが更に伸びることで更に後傾が激しくなるという悪循環に陥ります。

このように削蹄時に蹄壁前面の長さを適切に削切するかしないかはその後の蹄病発生、ひいては牛の生産寿命にまで影響を及ぼす可能性があるわけです。

**注意:** 今回の内容は、皆さんに削蹄時に蹄壁前面の長さを最適化することの重要性を理解していただきたいだけです。決して削蹄師さんの技術不足等を批判する内容ではありませんのでご理解ください。



蹄骨骨端による蹄真皮への圧挫傷

左後肢外側蹄の蹄骨  
先端から後縁にかけてアーチ状の形をしておりこの後縁部分で蹄真皮を圧迫

